Satte Cultural Heritage
令和6年3月1日

幸手市文化遺産だより

幸手市郷土資料館
VOL.21

● 愛で、飾り、調べ、伝える 幸手の「雛」の歴史と文化

写真１
写真提供 百瀬修氏

写真２
写真提供 山西美由紀氏

写真３

初節供の雛段にいろどりを添える豪華な御殿と人形たち

写真1は、昭和38年（1963）3月、現在の幸手市大字下川崎の百瀬家で撮影された初節供の様子です。雛段には、御殿飾りと内裏雛・三人官女のほか、ガラスケース入りの愛らしい雛人形が所狭しと飾られています。

現在の雛飾りとは、ずいぶんと様子が違っていますが、現在の群馬県前橋市で撮影された昭和30年代の雛飾りの事例（写真2）とよく似た飾り方です。みなさんの雛飾りは、どのような飾り方だったでしょうか。

さて、ガラスケース入りの人形は、「藤娘」や「汐汲」（写真3）が多いように見えます。能楽や歌舞伎など舞踊を題材にした人形で、「浮世物」や「浮世人形」、あるいは「舞踊人形」（『岩槻人形史－埼玉百年記念－』）とも呼ばれています。また、最上段には、立派な御殿があります。

そこで、今回の文化遺産だよりでは、雛まつりの雛段に飾られてきた雛人形のなかの「浮世人形」と「御殿飾り」について紹介したいと思います。

● 御殿飾りと静岡

右のように、派手な色彩と造形がひときわ目を引く御殿飾りは、雛御殿とも呼ばれ、静岡県が主な生産地であったようです。

昭和天皇が即位した昭和３年（1928）に挙行された御大典をきっかけに、雛飾りに御殿飾りが流行します。静岡で生産された御殿飾りは人気が高く、昭和30年代までその流行は続きました。

中央の主殿は、城郭の天守閣をイメージさせる楼閣造りで、屋根に鯱の飾りがあることも特徴です。

また、屋根は瓦葺き屋根を表現し、主殿には唐破風と千鳥破風があります。こうした特徴は、静岡の雛道具の職人たちが、静岡浅間神社（静岡県静岡市）の拝殿を参考に考案した、あるいは同社境内社の八千戈神社本殿をモデルにしたと考えられています。

江戸幕府を開いた徳川家康ゆかりの静岡市は、駿府と呼ばれていました。久能山東照宮の造営のため集められた職人たちの技術は、駿河塗りと呼ばれる漆器などの塗り物や、木工などの伝統工芸品の製作に受け継がれ盛んに生産されるようになりました。

そうした技術が、やがて雛具や雛人形と結びつき、「静岡雛具（駿河雛具）」を生み出していくのです。

当館が収蔵する御殿飾りの生産地はわかりませんが、静岡の雛具製作の技術から生まれたものと考えられます。

（主な参考文献：松田香代子「「ひな祭り」のモノ資料からみる近代化：駿河雛具の御殿飾りを中心に」（2017『国立歴史民俗博物館研究報告』205所収）／日本玩具博物館hp「静岡製の御殿飾り」／松島徹『静岡雛具人形百年史』（1986 株式会社三和））

百瀬家資料

丸山家資料

令和5年度 企画展
郷土資料館 雛まつり

令和６年３月24日㈰まで開催中!!

郷土資料館が収蔵する御殿飾り雛をはじめ、大正から昭和にかけてつくられた内裏雛のほか、袢雛や幸手の際物師「松林斎亀山」作の浮世人形など、これまで収集してきたさまざまな雛人形を、雛まつりの時期にあわせて展示しています。

毎年、たいへん多くのみなさまにご来館いただき、よろこばれております。

ぜひ、ご覧ください。

幸手市郷土資料館　利用案内

開館時間　午前９時から午後５時まで
入 館 料　無料
休 館 日　月曜日（祝日の場合はその翌日）、年末年始

幸手市文化遺産だより　第21号
令和６年３月１日発行
編集：幸手市郷土資料館
〒340-0125 埼玉県幸手市下宇和田58-４
TEL 0480-47-2521
発行：幸手市教育委員会
幸手市郷土資料館
ホームページ二次元コード

一般に雛人形というと、内裏雛・三人官女・五人囃子・随身（ずいじん）・衛士（えいし）のセットを意味しますが、雛段に飾るそれら以外の人形のことを、商人たちは「浮世物」と呼んでいたといい（山田徳兵衛著『新編 日本人形史』）、浮世人形という呼び方が生まれた理由の一つと考えられます。

浮世人形は、能狂言をはじめ、歌舞伎の所作事（しょさごと）といわれる舞踊や御伽噺（おとぎばなし）が題材となっています。

岩槻人形連合協会が発行した『岩槻人形史—埼玉百年記念—』では、三番叟（さんばそう）・翁（おきな）・羽衣（はごろも）・道成寺・猩々（しょうじょう）・鶴亀・松風・高砂などのほか、浦島乙姫・花咲爺・神功皇后（じんぐうこうごう）などが題材として紹介しています。

こうした浮世人形は、現代の雛飾りにはあまり見られませんが、江戸時代から昭和時代まで、愛らしい人形たちが、雛段を華やかに賑わしていました。

それでは、郷土資料館が所蔵する浮世人形の一部とその題材についてご紹介します。

（主な参考文献：小学館『日本国語大辞典』・吉川弘文館『国史大辞典』）

末広（すえひろがり）

都に末広を買いに行った太郎冠者（かじゃ）は、悪者にだまされて、古傘を買って帰り、主にしかられる。そこで太郎冠者は悪者に教えられた囃子物をはやし、主の機嫌を直す、という狂言。

鶴亀（つるかめ）

中国の華麗な宮殿で初春の節会（せちえ）が行なわれ、皇帝は大臣や群臣の拝賀をうけて、鶴と亀の舞を見物し、また自分でも舞を舞う能楽。代表的な祝言能。鶴と亀は、寿命が長いとされ、縁起をかついで祝儀の意に用いたり長寿の象徴として用いたりする。

高砂（たかさご）

九州阿蘇の宮神主の友成が、都に上る途中、播州（兵庫県南部）高砂の浦に着くと、相生の松の精が老人夫婦〈尉（じょう）と姥（うば）〉として出現、松の木陰を掃き清め、友成に高砂と住吉の二本の松を相生の松といういわれや、松のめでたいことなどを語り、住吉に帰る。友成が住吉に行くと明神が現われ、御代を祝って神舞を舞う。祝言曲として、結婚式などの祝儀の席でもよくうたわれる謡曲。尉と姥は、能装束で熊手と箒を手にする。

松風（まつかぜ）・汐汲（しおくみ）

能「松風」に基づく歌謡、舞踊、戯曲などの作品の通称。古い能の「汐汲」をもとにつくられた。古名は「松風村雨」。旅僧が須磨の浦を訪れ、潮汲車を引きながら塩屋にもどってきた二人の海人の少女に宿を請う。僧がこの暮れ方に在原行平の古跡の松を弔ったというと、二人は涙を流し「自分たちは行平に愛された松風・村雨という海女の霊だ」とあかし、当時の有様を語る。そのうちに松風は恋慕のあまり狂気して、行平の形見の烏帽子狩衣（えぼしかりぎぬ）をつけて舞を舞う。娘の恋心を描く。

藤娘（ふじむすめ）

大津絵に描かれた人物をもとにつくられた舞踊。塗傘をかぶり、藤の花の模様の衣装を着て、藤の枝を肩にした娘の恋心を描く。大津絵は、江戸時代、近江国（滋賀県）大津の追分、三井寺あたりで売り出した、あらく走り書きした戯画。

道成寺（どうじょうじ）

紀州（和歌山県）道成寺の縁起にある安珍清姫の伝説にもとづく能楽の曲目。紀州牟婁（むろ）の清姫が、その家に泊まった熊野権現に参詣する途上の僧安珍を恋慕して、蛇身となって安珍を追う。最後には、道成寺の鐘の中に逃げ隠れた安珍を焼き殺すという物語。娘の激しい恋心を描く。能にもとづき歌舞伎舞踊の演目にもなった。

八重垣姫（やえがきひめ）

浄瑠璃・歌舞伎の演目である「本朝廿四孝」の登場人物。甲斐国（山梨県）の武田家と越後国（新潟県）の上杉（長尾）家の争いを主題にした物語で、武田信玄の息子勝頼の許嫁で長尾謙信の娘八重垣姫の一途な恋心を描く。手にする兜（かぶと）は、武田家家宝。姫は、勝頼に危機を知らせるため兜に祈り、狐の霊力で凍結した諏訪湖を渡り、心から慕う勝頼のあとを追う。

狆引（ちんひき）

官女が白毛の狆を引いている様子。大正時代まで人気があったが、昭和時代になると流行らなくなったという。狆は、体高25㎝くらいで、絹糸状の体毛で覆われた小型犬。奈良時代に中国から輸入され、江戸時代に盛んに飼育された。額が広く、眼と鼻が横一直線に並ぶ。

花咲爺（はなさかじじい）

室町時代末期から江戸時代初期に成立したとされる昔話。正直な爺が不思議な子犬を手に入れて宝物を掘り出したり、枯木に花を咲かせたりして富み栄えるというのが代表的な筋立て。日本五大昔話の一つ。明治時代に小学国語読本や絵本などに採録され広まった。

舌切雀（したきりすずめ）

昔話。善良な老爺が飼う雀が糊をなめ、それに腹を立てた老婆が雀の舌を切り追い出す。老爺は雀を探してその宿まで行き、宝の入った葛籠（つづら）を土産にもらい帰宅する。うらやんだ老婆も真似をするが、もらった葛籠には蛇や毒虫が入っていたという筋立て。日本五大昔話の一つ。